

日本経済新聞

平成19年10月29日～11月2日(夕刊)



『足場』は縁の下の力持ち

全国仮設安全事業協同組合
理事長 小野辰雄



全国仮設安全事業協同組合

日本経済新聞

平成19年10月29日～11月2日(夕刊)



『足場』は縁の下の力持ち

全国仮設安全事業協同組合

理事長 小野辰雄

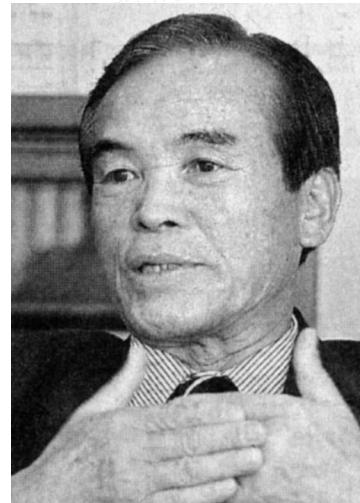


全国仮設安全事業協同組合

ひとスクランブル

全国仮設安全事業
協同組合理事長 小野辰雄さん

人間見発



①

「足場」は縁の下の力持ち

■物理的に落ちない仕組みを 今は人命尊重の時代

建設産業の現場で毎年尊い幾多の人命が失われ、一九九九年度は七百九十四人も及んでいます。その約半数は、建設費用のわずか数%にしかすぎない足場に起因するものです。現場に労働災害はつきものという風潮やヒューマンエラーの名のもとに、それを看過することはなりません。なぜならば、安全な足場工事によって転落労働災害は根絶できるからです。

足場には「二段手すり」を、床で転んでも落ちないよう「つま先板」を――。欧洲先進国では三十年前から常識という。これだと人や工具が物理的に外に飛び出さない。足場の解体・組み立て作業を常に二段手すりが先行して設置されている状態で行う「手すり先行工法」もある。こうした安全徹底がなされていないこと

昨年の建設業の死亡災害五百八件のうち高所からの墜落・転落によるものが百九十件で、全体の約四割を占めている。この現状に全国仮設（足場）安全事業協同組合（略称）ニアクセス）の小野辰雄理事長（67）は「事故ではなく人災だ」と怒りをぶちまける。

私どもは足場の製造、リース、解体・組み立てなど百三十社で構成する全国組合です。建設など

■転落事故は「人災」 点検徹底、死者ゼロ目指す

工事現場での事故を根絶するため、ボランティアで「足場の安全点検」を行うのが主な仕事です。組合員はみな中小零細企業ですから苦しいとは思ふ。でも足場は縁の下の力持ちで、こんなに重要なものはないんです。私たち足場業がいないと建物はできない。安全活動を社会に訴えるため創立から七年間で全国四万五千の現場を点検、改善し、そこから一人の死者も出でなかつた実績があります。安全点検ほど大事なものはないんです。

ジエットコースターの点検を怠ったことで一人亡くなつても大変なことなのに、建設業では昨年だけで百九十人も高所から墜落・転落死している。人生の大半を重量トビ、足場職人として高所作業をしてきたが、私がかかる現場では一人も死なせていません。

二〇〇〇年の組合設立総会で私はこう述べた。

が災害の主因と指摘する。組合の度重なる実験でも証明されています。それなのに日本では四七年の労働安全衛生規則で七十五回以上の高さに手すりが一本あれば事足りると定めている。そのまま六十年。転落事故が後を絶たないわけです。米国で開発された枠組み足場は側面が交差筋交いという「X」状のもので、すき間から簡単に転落していく。日本ではこれも

「手すりとみなす」とする役所の通達があり、事の元凶です。

交差筋父いの米国の建設現場は事故だらけです。米国流の非常にドライな考え方、『事故が起きたら保険で賄う』ということですから。しかし今や、そういう時代ではないでしょう。物理的に落ちないようにするのが何より大事。人命尊重の時代ですよ。（聞き手は

編集委員 工藤憲雄）



大連で。右端で母につかまっているのが本人

母タケは百歳で今も元気です。私も兄弟と一緒にお袋の行商の手伝いをして、趨(こうじ)や魚を、冬は吹雪の中を転びながら背負って歩きました。実家の援助もあって兄や姉は大学まで行きましたが、私もというわけにいかなかつた。本当は東京工業大学にあこがれていた。田舎の高校で学科もなんとかなると思って都市銀行を受けたんだす。それが最終面接でひ

聞きしにまさるものす「い職場に恐れを

父が終戦のハカ月前に亡くなつたので助かつたという言い方もできます。そうでなきや終戦孤児でどうなつてたか分からなかつた。行商で子どもたちを育ててくれた母タケは百歳で今も元気です。私も兄弟と一緒にお袋の行商の手伝いをして、趨(こうじ)や魚を、冬は吹雪の中を転びながら背負って歩きました。実家の援助もあって兄や姉は大学まで行きましたが、私もというわけにいかなかつた。本当は東京工業大学にあこがれていた。田舎の高校で学科もなんとかなると思って都市銀行を受けたんだす。それが最終面接でひ

前年の暮れに五歳で核で亡くなり、終戦前年も暮れに五歳で父の故郷、山形に引き揚げた。

父が終戦のハカ月前に亡くなつたので助かつたという言い方もできます。でもそういう道に行かなくてよかつた。天職があつたんですから。

とにかく食べるためには就職しないといけない。

石川島重工業(旧石川島播磨重工業、現IHI)

の臨時工の募集があつた。五八年当時は猛烈な就職難で、三カ月の臨時養成工百五十人の募集に五十倍の応募があつた。

強烈な印象でしたね。石川島のあった東京・豊洲で試験を受けたんです。

が、体育館のような会場に何千人もいました。そ

の年もいました。そ

が、その間に二度、足場から転落した。助かつたのが不思議なくらいで

ビとマルチにならなかった。その後、三年間で溶接からベット打ち、鍛造、铸造、重量ト

ビとマルチにこなした

工の三分の二は解雇されました。三カ月間というのは体力と能力のテスト期間でした。

その後、三年間で溶接からベット打ち、鍛造、铸造、重量トビとマルチにこなした

が、その後、三年間で溶接からベット打ち、鍛造、铸造、重量トビとマルチにこなした

が、その後、三年間で溶接からベット打ち、鍛造、铸造、重量トビとマルチにこなした

人間見発

「足場」は縁の下の力持ち ②

「食べるため」見習工に

■吹雪の中、母たちと行商

ものづくり・学問の重要さ学ぶ

■過酷な現場、仲間を一瞬で失う

編集委員 工藤憲雄

三カ月で特殊汽缶(ボイラ)溶接士の資格を取りました。当時、最も高い資格を取れない職人ともいひた。私は大阪大学出身の指導役だった先輩から冶金工学の本を借りて徹夜で勉強した。それで金属の特性など理屈(理論)がよくわかるようになつた。職人には学問が必要だと思いました。技能に理論が加われば絶対に技術としていかせる。このときばかりは大学に行きたくて、夜間大学に行けないものかと心底思つたものです。

仲間を事故で失うこと

で安全は身にしました。「安全は自分で守らなければ。だれも守ってくれない」と一日が終わるともうくたくただつた。朝起きると溶接や鉛(びよう)打ちの仕事で目が焼けて、目やにで開かない。それを指でこじ開ける毎日でした。しかし職人の仕事には私を夢中にさせるものがありました。

(聞き手は

短期見習臨時養成工であります。あるうが田舎では「有名な石川島に就職した」ということで母は大いぱり飛んで、目の前で数人が一瞬に亡くなつたこともありました。

当時は墜落や感電事故が多かつた。日本は造船建造高で英國を抜いて世界のトップに躍り出でました。仲間が死んでもその日の進水式は続行され、テープカットでお赤飯が配られる。憤りを覚えたが、それが普通だつた。船一隻造るのに五人も死ねば最高級のグレードといわれた。当の職人たちは死んだ数で「この船はすごいぞ」と威張る。おれはこういう所で仕事をしているんだと。恐ろしいことに、三年もいる自分のケガも人の死にも慣れてしまつ。

り続けた。社は「安

全と技術が信頼を結

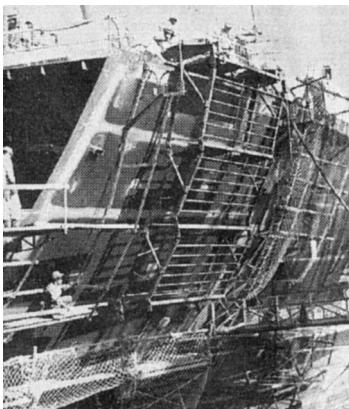
ぶ」とうたった。

三年で石川島重工業
を辞めた。学歴のな
い者や職人の地位の
低さ、作業員の人命

の軽さを身をもって
味わった。生来の負
けず嫌いが独立へと
向かわせる。わずか
二十一歳で請負の組
をつくり、親方とな
った。

自分で言うのもなん
で、短期間でマルチ職
人になった。溶接、板金、
鍛冶、製図など資格を取
りまくりました。促成で
計算もできた。中でも一
番長かったのが重量トビ
の仕事でした。東京ガス
や東京電力のプラントが
主な仕事場。超重量物の
運搬、据え付けや調整作
業で、トビや各種建設機
械の操作の知識と経験を
駆使し、現場の全員を掌
握する仕事です。これは
やりがいがあった。造船
では大型タンカー「出光
丸」が思い出深い。

辞めたのは差別がひど
かつたからです。高校し
か行つてなくても、これ
まで人に負けることはあ
まりなかった。石川島重
工業では本採用になつた
が、金然別扱い。食べる
い。食べるところも違うし
更衣室も風呂場も違う。大
卒とは雲泥の差で、職員採
用の高卒と臨時工がありと
でも全く違



曲線の船の現場にかかる足場には、転落の危険がつきまと

「足場」は縁の下の力持ち ③

う。職人の地位の低さに
憤りを感じました。今で
もそう変わりはありませんが。

辞めた翌日からも、未
端の仕事はあった。ただ、
何か文句を言つと「職人
は黙つて引つ込んでろ」
ですから。ものをいった
う「明日から来なくていい」となるので、ストレ
スもたまりました。請負
の請負ですが、親方とし
て七人の職人を食わして
いかなければならぬ身
分になつて大変だった。

いつも天気ばかり気に
していましました。雇われて
いるときは、雨が降れば
いいとなるわけです。「早く
夜になんないかなあ」
なんて。ところが独立し
てからそうはいかない。
雨では仕事ができない。
「職人殺すにや刃物は要
らぬ。雨の三日も降れば
いい」ですから。

職人を動かす立場に
なり、最も危険が伴
うのが足場作業であ
る。小野さんは安全
端に恐怖にかられ能
力を発揮できなくな
った。高所では途
ても、高所では途
ることを改めて実感
する。平場の腕があ
るだとかつたかられ能
力を発揮できなくな
った。しかしオイルショック
後の造船不況に見舞わ
れ、陸上の建設業界へ販
路を転換することになり
ます。

(聞き手は
編集委員 工藤憲雄)

人間見発

な足場づくりを本業
として取り組むため

会社を興す決心をす
る。

職人にいい仕事をさせ
るには、まず安全な足場
を提供することだと思
いました。自分が高所作業

をしているとき、「一番欲
しかったのが『手すり』
なんですよ。何かあった

ときパッと手を出せば必
ずつかめるもの。それが
手すりなんです。これを

つけるだけで足場の安全
性は格段に保障され、精
神的な安心感も得られ

る。手すりのところにな
つて、そればかり考えて
暮らしていました。

船の建造では高いとこ
るだと四十㍍くらいの高
さになる。ビルでいうと
十階くらいです。でも高
いから危険なのではありません。今はほとんどド

ック建造だが、昔はテー
プカットで船を海に下ろ
してやるスリップウェー
方式の船台で造つてい
た。船台での作業は直線
がまるでなく、全部曲線
全面傾斜です。オーバー
ハングでの溶接もある。

造船ほど難しくて危険な
作業はないんです。

この世界で十年たつ
た六八年に安全な足
場をつくることを本
業とする「口緑産業」
を設立、代表取締役
となつたが、最前線
に立つ職人としてあ

アをついに実現できた喜
びがありました。足場板
にはさむ「スタンション」
(手すり柱)というもの
です。これがなければ手す
りのパイプを簡単に横に
渡せる。その柱は職人に
とって、まさに鬼に金棒
の製品だったんですよ。
長年仕事をしてきた造
船所を回りました。当時、
足場を商品として売買す
る文化はなかった。自前
でつくるものなんです。
しかし次第に「これさえ
あれば」というのが浸透
してきました。造船業界の輸
出ブームにも後押しされ
た。全国を行脚して歩き、
相手の無理な注文にも応
えてきた。これができて
造船業界の死亡事故がぐ
っと減りました。

会社も軌道に乗つてき
た。しかしオイルショック
後の造船不況に見舞わ
れ、陸上の建設業界へ販
路を転換することになり
ます。

職人の教養を高め、
社会的地位の向上を
はかりたい。

ところから「職人大
学」の構想を胸に温
めてきた。

④

地位があまりに低いとい
うことでした。

所得が違うだけでな
く、職人のブランド力が
違った。パン屋さんや自
動車整備工、煙突掃除屋
さんにもマイスターがい
る。彼らは難しい勉強も
きちんとやる。技能と学
問の両方をマスターす
る。私が十八歳のころ思
つたことと一緒に、で
きなことがありました。
うれしかったですね。職
人に学問を与えれば、本
当に技術としていかすこ
とができるんですよ。

日本では産業分類の中
に「足場業」というのは
ない。専門性が高い職種
ではない。「トビ・土工・コ
ンクリート工事業」とい
う範ちゅうに内包されて
なのに、一方、ドイツのマ
イスター制度にはきち
ょう立っている。一方、ドイツ
の職人にも持たせた
い。制度は職人の誇りと
なっている。この誇りを
日本の人にも持たせた
いと思いました。

マイスター制度は国
文化としてもどうえられ
ており、社会的地位も高
い。制度は職人の誇りと
なっている。この誇りを
日本の人にも持たせた
いと思いました。

マイスター制度が、日本
の職人にも持たせた
い。制度を学ぼうとドイツ
を訪問。痛切に感じたの
は、やはり日本の職人の

平成に入つて間もなく、
社員に「職人の大学
をつくりたい」と言つた
んです。みんなあつけて
取られた顔をしてました
ね。本来、職人はプロで
こそ職人なんです。ドイツ
にはマイスターという
プロを育てる資格制度が
あり四百年の歴史があり
る。国内の労働者に技術
を教え込み、業界の後継
者として育てるのに大き
な役割を果たしている。

マイスター制度は国
文化としてもどうえられ
ており、社会的地位も高
い。制度は職人の誇りと
なっている。この誇りを
日本の人にも持たせた
い。制度を学ぼうとドイツ
を訪問。痛切に感じたの
は、やはり日本の職人の



マイスター制度の研究のためドイツを訪
問（テーブルの左から2人目が本人）

マイスター制度を重ん
じて来たドイツは国際競
争力がなくなつたとの指
摘もありました。

（テーブルの左から2人目が本人）

■職人の大学つくりたい ドイツのマイスター制度に学ぶ

英國やドイツと比べ労
働人口比で日本の建設業
は二、三倍の死亡事故が
ある。死亡事故が多発す
るのは日本の特殊性があ
るからだと思う。日本の
職人の世界は非常に弱い
ですから、声を出せない。
だから社会問題にならない
。政治家も無関心で、
下請けの職人層の声が政
治には反映されない。國
の役所もそうです。これ
では「3K体質」は何も
変わりません。

■実験校を開設、各地で講座 「終生現役」誇り育てる

二〇〇一年に埼玉県
行田市に「ものづく
り大学」が開校した。
この源になつたの
が、SSF（サイト
・スペシャルズ・フ
ォーラム）。小野さ
んが職人の地位向上
のために情熱を傾け
九〇年に設立したも
ので、現場技能者の
へと発展する。

（聞き手は
編集委員 工藤憲雄）

人間見発

案が通っている。

ものづくり大学の次の目標が「安全」だつた。高所災害撲滅のための組合をつくり、北海道から沖縄まで全国を行脚。半年間で三度巡回し、その熱意に足場業者が立ち上がった。

行動に移してみればみんなが同じような意識だつたんです。厳しい職場環境をどう改善し、事故を無くしていくか。「一人を殺すような職場であつてはならない。足場については私たち、半分は事故に関与している」と強く意識改革を促しました。安全は永遠の課題です。特に墜落災害は身をもつて忘れられない部分なんですよ。

事故に一番関係があるのが足場なんです。足場に力を入れる現場では、いい製品ができる。しがみついでやるようでは、



今でも現場に立つと、問題点が透けて見えてくる

「足場」は縁の下の力持ち ⑤

職人は腕を発揮できない。普通の通路と変わらない職人環境なら、生産効率も品質も上がるし、災害も起きない。「こんなに絶対に必要なものはない。誇りをもってやっていこう」ということです。

過去十年間で墜落・転落の建設労災で九万人もの人人が休業四日以上の死傷災害に遭つておらず、うち死者は三千六百人にのぼります。こういうのが放置されている。世の中の人はこうした現実を知らないか、知つていても避けて通ることがあるのではないか。

足場業ほど危ない職種はない。落っこちれば死ぬ。特殊なスペシャリリストの分野です。命と引き換えの人が多い。それなりに有資格者の第三者による安全点検制度もない。点検を義務づけるべきなのに安全を守る設備になつていなっています。

先板があれば落ちなくてす。過去、手すりとつま打でど響かず。安倍晋三首相（当時）にこの問題を提起したところ、ようやく厚生労働省で「足場

からの墜落防止措置に関する調査研究会」が始まつた。手すり先行工法の普及と、二段手すり、つまり先板の設置と安全点検の義務化をお願いした。しかし会議では、私と他の多くの委員とが平行線という状況です。

すべてヒューマンエラーとして片づけられる。「手すりの高さを七十五㌢から八十五㌢に上げましょう」。会議の方向付けはこれくらいのものです。一本の手すりとシートを張つていれば人身事故は防げると結論づけようとしている。これはあまりにひど過ぎます。

日本の建設労働者五百六十万人のうち、ブルーカラーは四百万人。足場で作業する職人はその半分の二百万人もいる。

日本の重層下請け構造がいいか悪いかは別問題としても、建設職人は大事にされていないのが現状。技能とか技術の伝承というところもおろそかになる。近年、大手の造船や自動車、機械工作などの製造業で職人が正社員として保護されない事にされていいます。

日本は建設業で職人が正社員として保護されない事にされている。どんどん下請けを事業主にできることで下請けを事業主にできました。厚生労働相に申請すれば、元請けは下請けを、下請けはそのまま下請けを事業主にできました。どんどん下りていって最後は一人親方に行き着く。ケガの治療費や保険は職人が自分で払わなければいけないとなってしまった。知らないうちにこんな法

人間見発

■手すりさえあれば… 政府の研究会で孤軍奮闘

一九九九年に労災保険で下請けを事業主としてみなししていいという法律ができた。厚生労働相に申請すれば、元請けは下請けを、下請けはそのまま下請けを事業主にできました。どんどん下りていって最後は一人親方に行き着く。ケガの治療費や保険は職人が自分で払わなければいけないとなってしまった。知らないうちにこんな法

■下請けと大手の格差深刻 「物を言う職人」として行動

（聞き手は
編集委員 工藤憲雄）